かくれて、宿立人の袖はみえ、餘所なる聲によばれて、ゑらぬ友にうちつれて出づ、ゑばらく舊橋に立とゞまりて、めづらしきわたり、興すれば、橋の下にさしのぼるうしほ、かへらぬ水をかへし、上ざまにながれ松をはらふ風のあしは、かしらをこえてとがむれどもきかず、〇中略

橋本やあらぬ渡りと聞しにも猶過かねつまつのむら立

浪まくらよるしく宿のなごりには殘してたちぬ松のうら風

十一日に橋本をたつ、橋のわたりより行々たちかへりみれば、跡に玄らなみのこゑは、すぐるなごりをよびかへし、路に青松の枝は、あゆむもすそを引とゞむ、北にかへりみれば、湖上はるかにうかんで、なみの玄は水の顏に老たり、西にのぞめば、湖海ひろくはびこりて、雲のうきはし、風のたくみにわたす、水鄕のけしきは、かれもこれもおなじけれども、湖海の淡鹹は、氣味これことなり、浥のうへには、浪に翥みさごすゞしき水をあふぎ、舟の中には、唐櫓おすこゑ秋のかりをながめて、夏の空にゆく、本より興望は、旅中にあれば、感腸玄きりに廻りて、おもひやみがたし、

〔東關紀行〕橋本と云所に行つきぬれば、き、わたりしかひありて、けしきいと心すごし、南には潮海あり、漁舟波にうかぶ、北には湖水有、人家岸につらなれり、其間に洲崎遠くさし出て、松きびしく生つゞき、嵐玄きりにむせぶ、松のひゞき波のをと、いづれとき、わきがたし、行人心をいたましめとまるたぐひ、夢をさまさずといふ事なし、みづうみにわたせる橋を濱名となづく、ふるき名所也、朝たつ雲の名殘、いづくよりも心ぼそし、

行とまる旅ねはいつもかはらねどわきて濱名の橋ぞ過うき

〔六代勝事記仲恭〕同十五日〇承久三年六月に、百萬のいくさ入洛して、畿内畿外にみちみてり、〇中略近習寵臣の邊功をたつる、ことく〳〵くとらへられぬ、大納言忠信、〇中略宰相中將信能卿等、心ならぬ旅の空、をくれさきだつあづまぢのゆくすゑに、なをあしがらのせきあへぬ涙をかけて、いかにな